

# 買い物学習の取組について

～自立活動から通常の学級での発表～

吹田市立山田第一小学校 豊島秀多

## 1. はじめに

プリントなどの学習では、なかなか文字や数字についての理解が深まらない児童について、どのようにして興味を持たせながら学習を進めるかを考えた。この取組では文字や数字についてより定着を図る為に、日常生活に近い実体験をさせることに注目して取り組んだ。その中で、お金の使い方や自分の名前・住所が正しく言えたり書けたりするように指導し、実際に店舗へ行っての買い物学習へと繋げていった。また、支援の学級での学習内容を子ども自身の発表によって通常学級の児童に伝え、本児のように支援の必要な友だちについての理解を深めていくよう取り組んだ。



## 2. 実体験をさせることの意味

### ①模擬体験ではない、実体験が必要

Aの特徴として学習の定着が難しいことに加え、体験の応用が利かないということが挙げられる。例えば、りんごを使って1個+1個が2個と覚えたとしても、対象物がバナナに変わると、もう一度、 $1+1=2$ と覚えなおす必要があった。このため“買い物ごっこ”で模擬体験をしたとしても、実際の買い物の流れやお金の使い方の理解に結びつけることが非常に困難であると考えた。そこで実際に体験することを通し、文字や数字だけでなく社会性を身につけ、自立に向けた体験活動を豊かにしていこうと取り組んだ。



### ②実体験をするにあたっての授業での取組

国語の授業では、文字の定着よりも自分の生活にとって必要な文字を知ることに取り組んだ。また、特に外に出ることにあたって、自分の名前や住所がはっきり言えることや書くことができるよう指導した。算数の授業では計算ではなく、お金の種類分けができ、大まかな価値を理解することに集中して学習させた。また、買い物学習にあたっては次のような流れを事前に学習させた。

- ・欲しいものを探す → 持っているメモを見る → わからない時はお店の人に聞く(メモを見せる)
- ・レジで商品を渡す → 額面の大きい硬貨からお金を払う → 商品を受け取る → お釣り・レシートをもらう

### 3. 実体験を行っての効果

事前学習の中では、お金の模型を使った学習を省き、実物の硬貨を使って行った。このことにより対象物の形状が変わったときの困難さを解消し、学習時間の短縮にも繋げることができた。実際の買い物の中では、はじめは横で細かい指示を出しながらレジの体験をさせた。回数を重ねるうちに、困った時は人に聞くことやメモを渡して助けてもらうことなど、実体験を通して覚えていくことができた。更にはメモを渡すことや、単語だけの声かけから、「〇〇どこですか」と、簡単な文章での会話文ができるようになっていった。家庭内や学校の中では単語で通じていたが、外では通じないことを感じる事ができ、Aの成長へと繋がったのではないだろうか。“困ったときには話しかける”“伝わらない時にはメモも使う”といったコミュニケーションのパターンを自然に身につけていくことができたことは、実体験に基づく効果が大きいであろう。また、最近、店舗でしばしば見られるセルフレジなど、学校ではできない体験活動についても豊かにしていくことができた。

### 4. 取組の内容を通常学級へ返していくことの大切さ

これら一連の学習をビデオに収め、Aが通常の学級で自分の学習を発表することに、最終目標を設定した。事前に学習した内容を学級のみんながビデオで確認し、Aの“できること”を教室で発表することにより、子どもたちの目線を変えていくことができた。関わりの深い子どもも、そうでない子どもも、Aのできることを理解することで関わり方を考えるようになった。その中で“一緒に勉強したい”“Aを支えて仲良くしたい”という子どもの感想がたくさん聞かれた。Aを通して障がいのある人との関わりを知るよいきっかけとなっていた。またAにとっても困った時に、他の人から上手に助けてもらう方法を知るための取組へと繋げていくことができた。



[詳しい動画などはCtrlキーを押しながらこちらをクリックするとパワーポイントで見ることができます](#)

(Microsoft Office PowerPoint 2007 以上推奨)



### 5. おわりに

今回の活動を通じ、一人ひとりの障がいに応じた指導、そして体験活動の重要性に改めて気付いた。今度はさらに自立を視野に入れた学習内容を計画し、個々に合った指導を行っていきたい。また、支援学級在籍児童の活動を通常の学級にも積極的に伝えることで、障がいのある子どもが地域社会の一員として豊かに生活できることを目指していきたいと考えている。

